

研究ノート

R.K. マートンによるアスピレーション調査
コロンビア大学所蔵アーカイブ資料からの素描武岡 暢ⁱ

本稿で主題とするのは社会学者R.K. マートンが1950年前後に実施したアスピレーション調査である。マートンが理論研究以外に経験的調査に携わっていたことは一部の論者に注目されているもののあまり知られていない。しかしながらマートンは自身が主張した「理論と調査の往還」をみずから実践していた形跡が色濃く、その内実を探ることは学説史、方法史の両面にとって意義がある。そこで本稿では米国コロンビア大学に所蔵されているアーカイブ資料を用い、マートンが実践した調査の概要を明らかにすることを目指す。最も重要なのは調査の結果とその分析であるが、それらについて検討するための準備作業として、これまでほとんど知られていない調査の経緯や概要、関係者などの基礎情報を押さえておくことが有用である。本稿ではアーカイブにおいて未整理な状態で保管されている各種資料を主として時系列順に整理し、調査実施の経緯や事実関係を明らかにするとともに、どのような理論的な観点が調査設計の段階で盛り込まれたのか、調査の進展とともにそれらがどのように変化していったのかを明らかにした。

キーワード：R.K. マートン、社会調査史、アスピレーション、アノミー、準拠集団

1. 本稿の目的

本稿では米国コロンビア大学に所蔵されているR.K. マートンのアーカイブ資料のうち、特にマートンが実施したアスピレーション調査に範囲を絞り、その概要を整理して今後の探究のための基盤を整備することを旨す¹⁾。

マートンの遺した資料は当該アーカイブに膨大に所蔵されており、そのヴォリュームから見れば極めて秩序だった状態で保存、公開されている。それでも1枚1枚の資料に目を通していくと、やはり雑多な種類のもものが時系列もばらばらにひとまとめにされており、重複も多く、そのままの状態では全体像

がつかみにくい。それぞれの目的に応じた整序は利用者の手に委ねられている。

今回取り上げるアスピレーション調査については、調査データの中身の検討に入る以前に調査の経緯や体制、関連する主体や組織等の配置をある程度まで明らかにしておくことが有用である。本稿の構成は以下の通りである。まず次節の第2節ではアスピレーション調査について概要を紹介し、その後第3節では調査の舞台となったマンハッタンヴィル地区について説明する。その後第4節ではアーカイブ資料の構成を素描し、第5節ではアスピレーション調査に関して残されている資料から、時系列的にどのような出来事が推移したかを見る。最後に第6節で以上の内容を振り返り、今後の研究の方向性に関する大まかな見通しを提示する。本稿はこれ自体で独立してまとめた知見を提出するものではなく、マー

i 立命館大学産業社会学部准教授

トンが実施した調査の内容について検討を始めるための予備的作業として位置づけられる。

2. アスピレーション調査について

2-1. 調査者マートン

「順機能と逆機能」, 「予言の自己成就」, 「中範囲の理論」など、華々しい理論の仕事がよく知られているロバート・K・マートン (1910-2003) が、いくつかの大規模な経験的社会調査を行っていたことはあまり知られていない。マートンは生涯にわたりいくつかの理論的な主題についてさまざまな角度から著作を発表し続けたが、第5節で取り上げる『大衆説得』のように、大がかりな社会調査に基づいた作品も遺している。

このマートンの調査研究とその重要性について気付いたり指摘したりしてきた研究者はかねてより少数ながら存在していた。近年では祐成保志がまとめた紹介に着手しているほか、米国でも行き届いた検討が始まっている (祐成 2014, 2022; Fox 2020)。

マートンの調査研究について言及してきた文献は、主にマートンのハウジング調査に焦点を当ててきた。マートンのハウジング調査は質の高い報告書が脱稿段階まで完成されており、それをアーカイブで閲覧することもできる。しかしいくつかの事情で決して出版されることはなかった。調査の規模やデータの豊かさ、マートンの手になる分析の鮮やかさや社会学全体に対して有する含意の大きさ、調査プロセスについて付されたアペンディクスの興味深さなどから、ハウジング調査が最も注目を集めてきたことは全く正当なことである。

このハウジング調査の社会的意義は、他にマートン手がけたいくつかの調査に関する興味を惹起する。主著『社会理論と社会構造』において繰り返しハウジング調査が言及されていることから分かります。マートンは自身で手がけた調査と理論的な関心との接続について極めて意識的であった。これまで理論的な仕事によって高い名声が付与されて

きたマートンだが、その背後には理論と密接に結びついた調査の経験がある。その調査がどのようなもので、どのように理論と調査が相互作用していたかといった点が、ほぼ未踏の課題として丸ごと残されている。

2-2. アスピレーション調査概要

上記のハウジング調査が1945年から1948年にかけて実施され、報告書が1951年に完成したのに対して、本稿で取り上げるアスピレーション調査は1949-1950年に実施された。アスピレーション調査についてはハウジング調査とは異なり、まとまった報告書が完成された様子はない。

コロンビア大学図書館内にある Rare Book & Manuscript Library に所蔵されているマートンのアーカイブは全部で8つの Series に分かれている。アスピレーション調査に関する資料はその中の Series VI: Studies and Projects, 1935-1997 に含まれる。資料には“Manhattanville Project”のタイトルが付されており、内容は大きく (1) メモや関連書簡, (2) インタビューと参与観察の記録, (3) 学生によるデータ分析, の3つに分かれる。分量として最も多いのは (2) である²⁾。

アスピレーション調査は、コロンビア大学に隣接するマンハッタンヴィル地区に対象を限定して、そこに居住する世帯の成員にインタビューするとともに、世帯に繰り返し訪問することによる参与観察も含んでいる。マンハッタンヴィルは非行や犯罪が多発しており、次節で見るように一種のスラム地区と見なされていた。マートンはしかしそうした地区においても多くの住民は非行にも犯罪にも携わらない点に注目した³⁾。スラムにおいて非行少年ではなく、非行少年以外の者に焦点を当てる方針が、この調査を特徴付ける。逸脱をする者としない者のちがいについて、しなない者の側からアプローチするのである。

しかも非行少年以外の者に対して逸脱に関連した質問を直接につけるという方針をマートンは採ら

ない。ここで登場するのがアスピレーションである。つまり、大人になってから何になりたいか、どのような職業に就きたいか、どのような場面で憧れが放棄されるのか、現実を直視して生じた幻滅から来るフラストレーションはどのように処理されるのか、といったことが調査される。調査対象は世帯成員全員なので、若年世代からは現在進行形のアスピレーションが、それより上の世代からはアスピレーションとその変遷に関する回顧データが回収される⁴⁾。

言うまでもなく、アスピレーションが放棄されたり挫折したりすることと、非行や犯罪といった逸脱との関連がここで照準を合わせられているテーマである。職業的、経済的フラストレーションが逸脱につながるのはどのような場合か？どのような場合に諦めや無関心の態度によって逸脱が回避されるのか？逆に諦めや無関心が反抗につながるのはいつか？——以上のようないくつかのサブエスチョンがこの調査の理論仮説を構成する。

インタビューは項目数も多く、また今日で言う半構造化インタビューであった。つまり、調査者にはインフォーマントの回答に応じて更に突っ込んだ質問を重ねるよう指示が行われていた（例えば回答者が「運」という言葉を使ったら、「運というのはどういう意味ですか」とさらに質問を重ねる等⁵⁾。これに加えて参与観察データも持ち帰ることを期待されていた調査者の負担は決して軽いものではない。この調査を実質的に担ったのは動員された大学院生たちであり、マートン本人がインタビューをしたり参与観察を行ったりした形跡はない。大学院生たちのマネジメントも番頭のような大学院生（後述の Hanan C. Selvin）にやらせており、マートン自身は全体を統括する役目を担っていた。

アーカイブにはこのようにして調査者がインフォーマントにインタビューし、参与観察して作成した調査記録の大部の冊子が残されている。調査の「結果」、あるいは調査から得られた「データ」は、直接的にはこの分厚い冊子に収められている。その内容を理解し解釈するに当たっては調査の背景や文脈を

詳らかにすることが、予備的な基盤整備となるだろう。

3. マンハッタンヴィル地区と近隣センター

マートンによるアスピレーション調査はニューヨーク市内のマンハッタンヴィル Manhattanville という地区で実施された。マンハッタンヴィルはおおむね北は135丁目、南は122丁目、西はハドソン川、東はアダム・クレイトン・パウエル・ジュニア・ブルバードで囲まれたエリアであり、アフリカ系アメリカ人の集住地区として知られるハーレムと接している（ハーレムの一部とされることもある）。近年に至るまでハーレム全体がそうであったように、マンハッタンヴィルもまたときに「スラム」としてカテゴライズされることのある地区であった。

マンハッタンヴィル地区の南西側には「モーニングサイド・ハイツ」地区が隣接している。ここはコロンビア大学のキャンパスも所在する高台で、住宅街としても高級である。モーニングサイド・ハイツから見れば谷間にあるマンハッタンヴィルとの対比がここで見て取れる。1950年ごろの時点で、マンハッタンヴィル地区住民の3分の1がアフリカ系、3分の1がプエルトリカン、残り3分の1は22の国籍で構成されており、とりわけ少年非行の多さについては合衆国全土に知られていたという⁶⁾。

3-1. マンハッタンヴィル近隣センター MNC

1944年、このマンハッタンヴィルに近隣センター (Manhattanville Neighborhood Center, 以下 MNC と略) が設立された。1946年にはリバーサイド教会（この教会はマンハッタンヴィル寄りのモーニングサイド・ハイツにある）の牧師を引退した Harry Fosdick が近隣センターの長に就任し精力的な活動を始める。「このセンターには、チャイルドケアセンター、思春期の少年少女と大人のためのクラブ、教室、工芸、サマーキャンプ、そして街頭のギャングたちに働きかける専門家のリーダーたちが含まれて

いる」⁷⁾。MNCは地域のさまざまな施設や組織の結節点として構想され、それら施設や組織の長やメンバーが参画していた。コロンビア大学も例外ではなく、ProvostのAlbert C. JacobsがMNC副会長の座に就いている。

MNCは地域の改善と再生を目指していたが、そのための資源として目をつけられたのがモーニングサイド・ハイツにあるコロンビア大学である。当時、コロンビア大学はマンハッタンヴィルとは没交渉であったが、全米でも有名なエリート大学に蓄積された学知はマンハッタンヴィルの改良に役立つものと期待された。

3-2. クライド・マレー Clyde Murray

そうしたなかでMNCとコロンビア大学の両者にまたがり、架け橋としての機能を割り当てられたのがClyde Murrayである。Murrayは多彩な経歴を持つ。1949年にMNCの役職を得た際には、他にもセツルメントの職長head workerと神学校の教師を務めていた。それ以前には全米セツルメント連盟の会長を5年間務めていたほか、隣保館、全米ソーシャルワーカー協会、NY市福祉委員会、全国青少年会議等々の理事を歴任してきた⁸⁾。

Murrayが割り当てられたのは二重の職務である。ひとつはMNCのエグゼクティブ・ディレクターであり、もうひとつはコロンビア大学のProvostオフィス内に設置された地域プロジェクト担当顧問という役職である。こうした体制のもとで、MNCの通常業務以外に、コロンビア大学の学生ボランティアをマンハッタンヴィルに導いたり、地域問題の解決や発信に関して助言したりすることがMurrayに求められた役割であった。

構想に含まれていたのはMNCがコロンビア大学の専門知を利用する関係ばかりではない。MNCはソーシャルワークに関する研修の場としても捉えられていた。コロンビア大学を含むさまざまな機関の大学生や大学院生が、ときに専門家の卵としての、ときに専門家そのものとしての、そしてときに非専門

家としての経験を積めるような媒体としてMNCは目された。

Murrayが体現していたこのようなMNCとコロンビア大学の協働関係への期待において着手されたのが、本稿の主題となるアスピレーション調査であった。

4. アーカイブ資料の概要

マートン・アーカイブにおいてこのアスピレーション調査に関連する資料の主要部分は217番、218番、219番のBoxに含まれている。218番と219番は詳細なフィールドワークの記録（たとえばBox 218内の記録は600ページを超える）であり、Box 217の3番、4番、5番のFolderには調査に関連した書簡やメモなど雑多な資料が頁数として延べ250枚ほど収録されている。

5. アスピレーション調査に関する出来事の継起

Box 217 Folder 3, 4, 5に含まれた資料は時系列順にも内容別にも大まかにしか整理されていない。そこで本稿では資料全体を見渡す整理のための第一歩として、資料を時系列順に排列し直し資料の一覧性を高めるとともに、アスピレーション調査に関してどのような出来事が継起したのかを整理していきたい。

5-1. Fosdick → Willits (1949年5月13日)

アスピレーション調査に直接関連したものとしてこの資料群に含まれる最も古い日付は1949年5月13日のものである⁹⁾。これはMNCの長であったFosdickの署名のついた書簡であり、ロックフェラー財団(Rockefeller Foundation, 以下RFと略)のJoseph H. Willits宛に資金援助を求める意図が綴られている。そこでは前記のようなMNCの役割と意義が説明されているほか、全体がひとつの「研究プログラム」としてパッケージされており、その研究

計画に対して人件費を主とする予算請求がなされている(3年間の合計で22,000ドル)(Box 217 Folder 3)。

しかし5月24日には資金の提供が難しい旨を伝える書簡が Willits から返ってくる。RFの規約では「ローカルな福祉団体」への寄付の要請は原則として断ることになっているという。さらに計画の見通しが甘く、提案された予算では十分な調査研究を実施するための人材を得て綿密に実践に移すことは困難ではないか、と Willits は述べる。Willits は RF が援助したいいくつかの調査研究を例に挙げており、それらを念頭に置いてマンハッタンヴィルの計画を査定していることが分かる。

ここで Willits はいささか唐突にも見えるタイミングでマートンの名前を挙げる。「この問題について、コロンビア大学応用社会調査局のロバート・マートン教授に相談してみたらどうでしょうか」(Box 217 Folder 3)。

5-2. Willits → マートン (1949年5月25日)

マートンの名前を挙げたことについて Willits はすぐさまマートン本人にも電話で伝えたようである。その電話についてマートンが作成したメモが5月25日の日付で収録されている(Box 217 Folder 3)。マートン自身はたしかに近年「都市研究部門」を発展させてきていることを Willits に伝えており、必ずしも後ろ向きの姿勢ではない。その後につされた、おそらくはマートンが自分自身や近い関係者にのみ通じるように書いたメモは省略が多く、意味が判然としないところも多い。しかしながらマートンと応用社会調査局は以前から Willits とやり取りがあり、マートンはこのようなかたちで白羽の矢を立てられることを全く予想していなかったわけではないようである。

さらにアーカイブにはマートンがこの Willits からの電話を Kingsley Davis と Paul Lazarsfeld の2人にその日のうちに共有したメモも残されている。Willits は RF がストウファーに助成したニューメキシコ研究の例などを挙げながら、マートンがマンハ

ッタンヴィルの調査計画に関して助言する可能性に言及した。同時に Willits は、マートンや Lazarsfeld がすでに未完成の研究プロジェクトを複数抱えていることを承知しており、さらに負担を増やすことのためにためらいを表明している。

コロンビア大学応用社会調査局と RF との関係がどのようなものであったのか、現時点では本稿が全体像を描き出すことは難しい。少なくとも、マンハッタンヴィルにおけるアスピレーション調査は、応用社会調査局と RF との関係の全部ではなく、一部として始まった。

5-3. Jacobs (実はマートン) → Willits (1949年9月28日)

Willits によって半ば指名されるようなかたちでマンハッタンヴィルに関係させられてしまったマートンであったが、そうした「動員」を固辞したわけではなかったようである。さらに Murray も Jacobs (コロンビア大学 Provost)宛の書簡のなかで「Willits 氏がマートン教授を特に信頼していることは明らか」と述べており、RF だけでなく MNC もマートンを引き込む方針に前向きであった(1949年6月15日付, Box 217 Folder 3)。

同年7月から8月にかけて、マートンは Murray と何回か会合を持ち、他に獲得できそうな外部資金がないかを検討したりしながら策を練っていたらしい。その成果が8月、9月に数バージョンが作成された、Jacobs から Willits への研究資金の再申請書である。最初の申請書が MNC の Fosdick 名義で作られたのに対して、今回はあくまでコロンビア大学の Jacobs 名義であり、「ローカルな福祉団体」への寄付を禁ずる RF の規定に抵触しない工夫が加えられている。さらに、これについては作文をマートンが担当した。

ここでは従来の MNC による計画の無謀さが反省され、まず着手すべきは予備的調査であることが述べられる。「マンハッタンヴィル地区は社会学的実験室 sociological laboratory を構成しており」、そこで

は「社会的対立と協力が日常的に行われている」。そうした地区に関する先行研究は「不良住宅、非行や犯罪、不健康、家庭崩壊、適切な公共サービスといった直接的な問題にはほぼ全面的に集中している」が、むしろマンハッタンヴィルは民主的価値が都市コミュニティにおいて阻害されずに発展するための要因を探るための有益な事例となるかも知れない。そしてこれは類似の地区における都市再開発の際に参考となるような知見を提供するだろう。とはいえ全ては予備的、探索的段階にあり、そうした探索的調査をまずは1年間行うための資金1万ドルを申請したい——(以上この段落はすべて1949年9月9日付の書簡草稿, Box 217 Folder 3)。

1週間後の9月16日にはJacobsからマートン宛に、代筆を感謝する書簡が届いている。微妙な修正を経て、マートンが作成した草稿をもとにJacobsがWillits宛に書簡を送ったのが9月28日のことであった。

ほどなくしてRFからは1万ドルの助成決定を知らせる通知が届き、Jacobsはマートンに謝意を示す書簡を送っている。

5-4. Selvinの参加と調査計画(1949年10月~11月)

こうしてマートンはマンハッタンヴィルでの調査に本格的に関わり始めるが、最初に手をつけたのはHanan C. Selvinという人物を計画に引き入れることであった。Selvinは当時27歳前後、おそらくは大学院生であろう¹⁰⁾。以後、マートンはSelvinとのミーティングで自分の考えを伝え、それをSelvinにメモを取らせまとめさせるかたちで整理していく。

Selvinは前述のマートンのハウジング調査(1945~1948)にも参加しており、*Journal of Social Issues*で1951年にハウジング特集が組まれた際にもマートンらとともにゲストエディターに名を連ねている(他にPatricia S. WestとMarie Jahoda)。すでにSelvinはマートンから一定の信頼を得ており、その上でマンハッタンヴィル調査にも動員されたものと

見られる。

■日付なしのメモ

まずSelvinがマートンに問うのが、なぜマンハッタンヴィルで調査をするのか?である(Box 217 Folder 3, RKMとHCSの対話録(無題の資料))。それはアクシデントであった、とマートンは答える。MNCがRFに資金援助を求めたがうまくいかなかったこと、マートンにお鉢が回ってきたことを説明する。そうした偶然の事情ではあったものの、マートン自身としてはスラム街に関して職業的欲求不満occupational frustrationとそれに関わる逸脱のテーマについてやり残したことがあると感じていた。マートンはSelvinに調査計画を立てさせるに当たり、アノミー論文が参考になるであろうことを示唆する。

アノミー論文とは言うまでもなくマートンが1938年に*American Sociological Review*誌に発表した“Social Structure and Anomie”を指す。そこでは文化的目標と制度的手段という2つの視点が設定され、その両者のあいだの緊張関係が逸脱を導くとされる。経済的成功といった文化的目標が広く普及している社会において、それを実現するための制度的手段が十分に整備されていないと、目的のためには手段を選ばない、いわゆるアノミーが増大する。言うまでもなくアスピレーションはこれらの概念との関連が想定されている。

■1949年10月26日付のメモ

この会談を受けておそらくはSelvinが作成したメモが残されている¹¹⁾。そこではマートンと話したことをメモの著者が発展させて調査設計に落とし込んだ様子が見て取れる。例えば調査に役立つ地図を作ることが検討される。地図にプロットすべき変数の候補が挙げられ、それらの相関が地図上で視覚的に分析されるであろうことが仮定される。スラッシャーの『ギャング』を参考にするというメモが付される。

注目すべきはMNCに対する態度である。この段

階のメモとしては当然のこととして、インフォーマントといかにしてラポールを築くかが検討される。その際、「MNCを疑り深く suspiciously 見る」、という注意書きが付される。多様なインフォーマントとラポールを築くためにMNCの力を借りるべき場面、力を借りなくても済む場面、力を借りるべきでない場面があるとされる。

本稿で見てきたように、この調査はMNCの発案で始まったものであり、マートンはそれに巻き込まれたに過ぎない。Selvinはさらにそのマートンに巻き込まれた大学院生である。しかしひとたび調査計画が動き出せば、社会学者たちは最大限の成果を上げるべく調査計画を立てる。マンハッタンヴィルについて理解するためには、MNCという組織との協力を自明の前提としない方がいいかも知れない。MNCに反感を持つインフォーマントにアクセスするためには、MNCとの関係はむしろ逆効果であろう。

■1949年10月28日付のメモ

「マンハッタンヴィル計画のための暫定的議題」と題されたメモには、予備調査に入るための準備と、調査員のリクルートや研修、そしてスケジュールなどについて簡単に整理されている¹²⁾。Peter Rossiの名前が登場し、この調査計画に（少なくとも部分的に）関わっていたことが分かる。

さらに同日付の「マンハッタンヴィル予備調査のためのいくつかの問い」と題されたメモには、「社会構造とアノミー」論文から引用または示唆されたものとして13項目の理論的問いが列挙されている。以下に引用する。

1. 様々な集団の中で、どのようなアスピレーションや目標が文化的に条件づけられているのか。家族、学校、非公式の遊びのグループなど、どのような手段を用いているのか？
2. これらのアスピレーションにおいて、さまざまな職業はどのような地位を与えられているの

か。年齢が上がるにつれて、アスピレーションとして、あるいは現実的な人生のチャンスとして、個人の職業ランキングはどのように変化するのだろうか？

3. 成功の一般的な規範とはどのようなもので、それに対してさまざまな職業は、達成のための代替的な具体的手段となっているのだろうか？このことは、失敗や、失敗と成功の間のあらゆる程度にまで広げることができる。
 4. 各職業において、インセンティブとステータスの関係はどのようなものか。
 5. 神話、たとえ話、ことわざ、民衆のヒーローなど、成功規範を支えるイデオロギーは何か？
 6. ある社会構造における各適応様式の頻度はどの程度か。
 7. 適応様式が変化する原因は何か？
 8. 成功のための制度化された手段への様々な集団のアクセスはどのようなものか？利用可能な手段、利用不可能な手段に関する彼らの情報はどの程度優れているのだろうか？
 9. 成功のための職業的手段の選択が、物質的あるいはその他の状況とは無関係に、最小化あるいは最大化されるような構造をもつ集団があるか。
 10. FEPC法¹³⁾、多人種住宅、税控除、その他の「福祉」活動は、アスピレーションと手段にどのような影響を及ぼすか？
 11. ある社会構造の中で、あるレベルの困窮に対する能力と、反応の暴力性との間にはどのような関係があるのか？（これは社会学的な問いではないが、意味のある問いだと思われる）
 12. 黒人にとって、カーストで制限された目標と、より大きな社会の手段とはどのような関係にあるか？
 13. 逸脱行動が果たす社会的機能とは何か。機能と承認の間にはどのような関係があるか？¹⁴⁾
- 1938年発表の「社会構造とアノミー」論文と、こ

ここでリストアップされている問いとの詳細な比較はここでは措く。確認すべきは、単にアノミー論文から引き出された問題意識だけではなく、マンハッタンヴィルの文脈に応じて拡張された論点が含まれている点である。つまり、アノミー論文の単なる検証を超えた、調査による理論の発展がここでは企図されている。

■1949年11月8日付のメモ

このメモにも署名がないが、作成者はおそらくマートンか Selvin のどちらかである。ここではインフォーマントの「偶像」や「英雄」について質問することでアスピレーションにアプローチする方法や、「金持ちは貧乏人より幸せか?」という質問で儀礼主義や退行主義の程度を測定する方法が「アイデア」として記されており、『大衆説得』の該当箇所が指示されている。

『大衆説得』はマートンによる1946年の著書である。大戦中の1943年9月21日の18時間のうちに、断続的に65回にわたって戦争債権の購入を訴えたラジオスターのケイト・スミスが、いかにして巨額の戦争債権を人びとに購入させることに成功したのか、というのが本書のテーマであった。つまり、スミスはいかにして、なぜ大衆を説得することができたのかが問われている¹⁵⁾。「偶像」や「英雄」についてはスミスがいかなるイメージをラジオ聴取者たちから投影されていたのかに関する箇所、また儀礼主義や退行主義についてはスミスのファンはそうでない人に比べて「金持ちは必ずしも貧乏人より幸せではない」という考えを支持する傾向があることに触れる箇所、それぞれ論じられている。

そのほかに、このメモではインフォーマントにテストを行うことに関する興味深い考察も見られる。

[インフォーマントにテストを実施することは]情報源として2つの観点から見ることもできるかもしれない。明らかに、テストの実質的な内容がある。また、テスト状況全体に対する [インフォー

マントの] 態度もある。競争、評価、得点、鉛筆と紙などに対して、人はどのように感じているのか。テストに対して感じている動機、テスト実施者に対する態度、などなど。これは、異なる文化集団に対して実施されるテストの通常の欠点の1つを、そのテスト固有の資産に変えることになる。どのようにこれを行うか。おそらく、短いテストの後に集中的なインタビューを行うことで、実現できるのではないか¹⁶⁾。

5-5. 計画の変更と実査 (1950年1月~)

1950年1月時点のメモではすでに実施された調査をもとに調査計画を変更する案が記されている (Box 218に含まれているインタビュー記録の最も早いものは1949年12月初旬の日付がある)。変更は軽微なもので、当初は世帯のうちで若年層のみを調査対象とする予定であったものを世帯員全員に変更すること、またコネなしに街頭のギャングに調査を試みるのを中止することである。

この時期のメモはすでに実査が始まっていることもあり、地区ごとの調査員の割り当てリスト、インタビューシートやそれに付された調査員向けの指示書き、さらに調査後の調査レポートの書き方に関するインストラクションなど、調査実務に関するものがほとんどである (主に Box 217 Folder 4 に収録)。Box 218と219に含まれているインタビュー記録を概観すると、インタビューシートに列挙されている質問項目を網羅するように調査が行われていたわけではなく、むしろ形式張ったインタビューにならないことが心がけられていたようである。

インタビューシート (インタビュー項目が列挙されている) にはいくつかのバージョンが用意されていたようだが、アーカイブに残っているのは A-4 (成年男性 Adult Males) と C-2 (女性 Women), D-2 (思春期女子 Adolescent Girls) の3種類である。ジェンダーとライフステージによって異なる質問項目を用意し、それぞれに応じたアスピレーションを探ろうとしていたことがうかがえる (例えば思春期女

子であれば結婚と仕事との関係に関する見通しがクローズアップされている¹⁷⁾。

5-6. 中間報告 (1950年9月)

アーカイブには1950年9月25日の日付で作成された進捗報告書の一部が残されている¹⁸⁾。署名はないがおそらく Selvin の手になるものであろうか。文中でこの報告書には序論と第1節、第2節といったパートがあると記されているが、残された資料のなかには該当箇所が見つからない。冒頭に置かれた全体の要約部分だけが収録されているものと見られる。

第1節に関する要約として資料に残されている内容は、アノミー論文に対する修正である。アノミー論文では文化的目標が個々の「行為者によって本質的に歪みなく認識され、個人に対して同等の影響を与える重要な対立する規範の集合は存在しない」¹⁹⁾ものとされる。しかし現実には個々の行為者が認識している規範はその社会の文化的目標を解釈した結果であり、対立する規範によって影響を受けたり、変更されたりしている可能性がある。マンハッタンヴィルの調査ではこうした可能性にとりわけ注意が払われる。ここではアノミー論文だけでなく、マートンの準拠集団論も参照されている。

第2節に関する要約ではさらに全面的に準拠集団論からの援用が見られ、アスピレーションを予期的社会化や相対的剥奪といった議論と関連づけながら分析する方針が示されている。しかし残念ながら先述の通り、肝心の分析内容について記された資料は発見できていない。

6. おわりに

本稿ではマートンの調査実践と理論的な探究との相互連関を見越して、マートンが携わったアスピレーション調査の基礎的な背景について記述してきた。予想通り調査と理論との関連は密接であったが、最終的にそれがどのような調査データの分析に結びついたのか、そしてそれが理論の彫琢にどのように貢

献したかといったことについては必ずしも明らかにできなかった。

本稿で取り上げられなかった資料としては、調査者たちが提出した調査レポートの大部の束のほかに、主題別にまとめられていない書簡の類や、マートンのアーカイブの外部に残されたマンハッタンヴィル調査の関連文書²⁰⁾など、いまだ実見できていないものがある。また、調査が実施された1950年以降のマートンの理論的な著作のなかに、マンハッタンヴィルでの調査に言及しているものがないかを探索する作業も有用であろう。いずれにせよ、調査と理論との生産的な往還如何を明らかにするためには、今後の本格的なアーカイブ調査が必要とされる。本稿はそのための予備的な基盤整備を意図したものであった。

謝辞

本論文はJSPS科研費13J04477, 18K12922, 22K13534の助成を受けたものである。

注

- 1) 本稿は2015年に実施したパイロット調査で撮影した資料に基づいている(当該アーカイブはコピー機が使用できないが、持ち込んだデジタルカメラで1枚1枚資料を撮影することができる)が、筆者は今後本格的な調査に着手することを予定している。
- 2) 実施された調査の全体がいかなる規模で、そのうちのどの部分がアーカイブに残されているのかについては今のところ不明。
- 3) N.d., "Draft of Manhattanville Proposal," Robert King Merton Papers, Box 217 folder 3.
なお、以下ではRobert King Mertonを適宜RKMと略記する。
- 4) マートンは特に職業アスピレーションを中心に調査を考えていたようであるが、実査の上では当然のことながら教育アスピレーションに関する質問項目も盛り込まれている。
- 5) 1950/3/1, "Instructions for Manhattanville interview guide A-4," RKM Papers, Box 217

- folder 4.
- 6) The Manhattanville Neighborhood Center, Inc., N.d., "A PLAN TO REDEEM NEIGHBORHOOD," RKM Papers, Box 217 folder 3, p.2.
- 7) The Manhattanville Neighborhood Center, Inc., N.d., "A PLAN TO REDEEM NEIGHBORHOOD," RKM Papers, Box 217 folder 3, p.4.
- 8) The Manhattanville Neighborhood Center, Inc., N.d., "A PLAN TO REDEEM NEIGHBORHOOD," RKM Papers, Box 217 folder 3, p.6.
- 9) それ以外では1948年12月6日付けのMNC内部に向けた以下の文書が最も古い。
1948/12/6, "Suggestions in regard to the plan for an advisor of community projects," RKM Papers, Box 217 Folder 3.
- 10) 1989年の死亡記事によれば, Selvin がコロンビア大学から博士号を授与されたのは1956年のことであり, 1967年から1985年にかけてはニューヨーク州立大学で教鞭をとっていた (*New York Times*, 1989/7/22, Section 1, Page 10.)。享年67歳。
- 11) 1949/10/26, "Notes on Discussion with RKM," RKM Papers, Box 217 Folder 3.
ただし Selvin の署名はなく, 内容からの推測の域を出ない。
- 12) 1949/10/28, "Tentative agenda for Manhattanville Project," RKM Papers, Box 217 Folder 3.
- 13) Fair Employment Practices Committee の略。軍需産業の雇用における人種差別の撤廃を目指した。
- 14) 1949/10/28, "Some questions for Manhattanville preliminary study," RKM Papers, Box 217 Folder 3.
- 15) 方法としては (1) ラジオ放送の内容分析, (2) ラジオを聴取した100人への聞き取り (うち75人は戦争債権を購入し, 25人は購入しなかった), (3)

- NY 市民約1,000人に対する横断的調査, の3つを組み合わせている (Merton 1946=1973: 19-25)。
- 16) 1949/11/8, "Ideas for questionnaire and interview guides," RKM Papers, Box 217 Folder 3.
- 17) 1950/3/31, "Manhattanville interview guide D-2 (Adolescent Girls)," RKM Papers, Box 217 Folder 4, p.4-5.
- 18) 1950/9/25, "Manhattanville Progress Report," RKM Papers, Box 217 Folder 5.
- 19) 1950/9/25, "Manhattanville Progress Report," RKM Papers, Box 217 Folder 5, p.2.
- 20) たとえばコロンビア大学 Rare Book & Manuscript Library の応用社会調査局関連資料には Kingsley Davis 名義でマンハッタンヴィル調査の資料が含まれていることが目録で確認できるが, 内容は未見。

文献

- Fox, Kenneth, 2020, "Sociology Applied to Planning: Robert K. Merton and the Columbia-Lavanburg Housing Study," *Journal of Planning History*, 19(4): 281-313.
- Merton, Robert K., 1946, *Mass Persuasion: The Social Psychology of a War Bond Drive*, Harper & Brothers. (柳井道夫訳, 1973, 『大衆説得』桜楓社.)
- 祐成保志, 2014, 「訳者解説——ハウジングの社会学・小史」Jim Kemeny, 1992, *Housing and Social Theory*, Routledge. (=2014, 祐成保志訳『ハウジングと福祉国家——居住空間の社会的構築』新曜社, 271-96.)
- , 2022, 「コミュニティを統治する——ハウジングの社会調査史」赤川学・祐成保志編『社会の解読力〈歴史編〉——現在せざるものへの経路』新曜社, 177-200.

Research Note

Survey on Aspiration Conducted by Robert K. Merton Preliminary Description from the Archival Material at Columbia University

TAKEOKA Toruⁱ

Abstract : The subject of this paper is an aspirational survey conducted around the year 1950 by sociologist R.K. Merton. Not many are aware that Merton was involved in empirical surveys in addition to conducting theoretical research, although this has certainly attracted the attention of some commentators. However, there are strong traces of Merton's practice of the "interaction between theory and research," which he advocated, and exploring the actual workings of this practice is significant for the history of theory and method. Therefore, this paper aims to provide an overview of Merton's research practices using his archival material held at Columbia University in the United States. The analysis and results of the research are the most important aspects. Before exploring them, it is useful to have some basic information on the background, outline, and people involved in the research, which, until now, has been largely unknown. In this paper, we organize the various materials that have been stored in the archive in an unorganized manner, mainly by placing them in chronological order, and clarify the process and facts of the survey, as well as what theoretical perspectives were incorporated in the survey design phase and how they changed over time as the survey progressed. The paper also clarifies the theoretical perspectives which were incorporated in the design phase of the study and how they changed over time.

Keywords : Robert K. Merton, History of Social Research, Aspiration, Anomie, Reference Group

i Associate Professor, College of Social Sciences, Ritsumeikan University

